

愛のきずな

奨励	小栗 献【おぐり・けん】
奨励者紹介	日本キリスト教団神戸聖愛教会牧師 関西学院大学非常勤講師（礼拝学・賛美歌学）

まだ幼かったイスラエルをわたしは愛した。
エジプトから彼を呼び出し、わが子とした。
わたしが彼らを呼び出したのに
彼らはわたしから去って行き
バアルに犠牲をささげ
偶像に香をたいた。
エフライムの腕を支えて
歩くことを教えたのは、わたしだ。
しかし、わたしが彼らをいやしたことを
彼らは知らなかった。
わたしは人間の綱、愛のきずなで彼らを導き
彼らの頸から轡を取り去り
身をかがめて食べさせた。

（ホセア書 11章1-4節）

ああ、エフライムよ
お前を見捨てることができようか。
イスラエルよ
お前を引き渡すことができようか。
アダムのようにお前を見捨て
ツエボイムのようにすることができようか。
わたしは激しく心を動かされ
憐れみに胸を焼かれる。
わたしは、もはや怒りに燃えることなく
エフライムを再び滅ぼすことはしない。
わたしは神であり、人間ではない。
お前たちのうちにあつて聖なる者。
怒りをもって臨みはしない。

（ホセア書 11章8-9節）

繋ぎ止める絆

このたびチャペル・アワーのメッセンジャーとしてお招きをうけたわけですが、春学期のチャペル・アワーの主題は「愛はすべてを完成させるきずなです」という聖書の言葉だとありましたので、今日のテーマはほぼそのまま「愛のきずな」といたしました。あとで考えるとあまりにベタな題になってしまって、自分でも恥ずかしくなっています。でもまあ、まさにそういうお話をしようと思っているわけです。

「きずな」という言葉は昨年来、本当にいろいろなところで語られてきましたし、今も語られ続けています。
あのとき、震災の直後、突然にしてすべてが失われ、徹底的に打ちのめされ破壊され、不安のどん底に叩き落され、どうしていいのかわからない、希望も見えない。そのただなかで私たちにできることはとにかく繋がり合うことだと、被災した人たちも、またそうでない人たちも皆が痛感させられていたように思います。

だから多くの人がこの「絆」という言葉に反応しました。そして、それを私たちは今まで失っていたのではないかとすることに、あらためて気づかされたところもある。そのときから、私たちはどのような絆によって繋がり合うことができるか、その可能性を捜し続けているように思います。

さてしかし、そもそも「絆」というのはどういう意味なのでしょう。広辞苑をひきますと、まず「動物などを繋ぎ止める綱」という意味が出てきます。絆の基本的な意味は「どこかへ行ってしまうように繋ぎ止めるもの」ということなのです。だから、絆という言葉には否応なしに「拘束する」という意味合いが入るのです。

皆さんは「情に絆（ほど）される」という表現を使うことがあるでしょうか。この「絆す」という言葉は漢字で絆と書きます。情に絆されるということは、本当はそれが自分にとって利益をもたらすような行動ではないことが分かっているのに、人情に縛られて、その関係に引張られて、相手のために何かをしてしまうということです。

そう考えると、考えようによっては「愛の絆」なんていう言葉は、恐ろしげな言葉です。「愛」に縛られてどこにも行けなくなってしまう……。どうでしょうか、首輪をはめられた飼犬よろしく「愛」の鎖に引きずられるなんてことを想像したらうんざりしますね。

でも、逆に言えば、なんらかの拘束力もないような絆には、いざというときに繋ぎ止める力もないのです。必要なときだけ現れてくる絆なんて、そんな都合のいい絆なんてない。ホームレス支援をしていた奥田知志という牧師さんが、絆ということについて「きずなという言葉はひらがなで書くと『きず』から始まります」ということを言っています。絆は「傷」を含んでいるのだと。絆を作りだし、それを維持していこうと思うなら、それには「傷つく」ことが伴うのだということです。

私たちはそのような拘束力をもった絆、ときには傷つくことがあるような絆を自分と誰かとの間に作ることを、慎重に避けてきたところがあるのではないのでしょうか。私たちはできれば必要以上に縛られたくはない。巻き込まれたくはない。また奥田牧師の言葉を借りるならば「傷つきたくない」。だから私たちは、そのような絆をあえて作らないようにしてきたのではないのでしょうか。

インターネットは世界中のあらゆる人と繋がる可能性をもたらしました。私たちは多くの人と「繋がっている」という感覚をもてるようになった。でも、多くの場合、ネットを通しての絆は簡単に断ち切ることのできる絆です。クリック一つで切ることのできる絆、それが繋ぎ止める絆になるとは思えません。

私たちのまわりにネットワークが張り巡らされている反面、多くの人が、自分には本当に自分を繋ぎ止めてくれる強固な絆がないという思いを抱いているのではないのでしょうか。先ほどから言っているように、「絆」とは繋ぎ止める綱です。それは、たとえば大海原の大嵐のなかでも舟がどこかに流されていかにように、海底に固定された錨と舟を結びつける綱です。あるいは、絶壁を登る登山者が墜ちてしまわないように、その命を支えるザイルです。繋ぎ止めておくものです。

私たちは心の奥底でそのような絆を心から求めていて、しかし、なかなかそれを見いだせずにいるのではないのでしょうか。傷つき、あるいは拘束されることを恐れるあまり、私たちの命そのものを守ってくれる綱をも確保できずにいるのではないのでしょうか。

情に絆される神

さて、イザヤ書という旧約聖書の書物にこんな言葉があります（イザヤ書63章15節）。聞いてください。

「どうか、天から見下ろし、輝かしく聖なる宮から御覧ください。
どこにあるのですか、あなたの熱情と力強い御業は。
あなたのたぎる思いと憐れみは。抑えられていて、わたしに示されません」。
この言葉はこの震災のなかで神に向かって発せられる叫びそのものです。
「どこにあるのか、神の御業は、神の憐れみは」

「神は何をしているのか。神は何を考えているのか」。今回の震災のなかで、一体どれだけの人がそんな言葉を発したでしょう。
しかし、このような叫びは、これまで本当に数知れぬ苦難のなかにある人びとが、あらゆる時代のあらゆる地域であげてきた叫び声でもあります。そして、この言葉が聖書にあるということが意味することは、今から2千数百年前にも、そんな叫びを神に向かってあげた人たちがいたということです。
「あなたがかつては、ご自分の民であるイスラエルにその熱情を示されたのではないか。たぎる思いが貴方のなかにはあったのではないか。でもそれは私たちにとはとても見えないの

だ」とこのイザヤ書はいうのです。神は今や冷たく、何もしてくれず、何の関心も私たちに示してくれないではないか。われわれは見捨てられてしまったのではないか。

この叫びを神はどのように聞いてきたのでしょうか。そして今どのように神はこの声を聞いているのか。今日一緒に聴いたホセア書の言葉は、このイザヤ書の言葉に対する神の応答と言ってもよいかもしれません。

「ああ、エフライムよ、お前を見捨てることができようか。イスラエルよ、お前を引き渡すことができようか。わたしは激しく心を動かされ、憐れみに胸を焼かれる」。

神はここで言うのです。

「私は激しく心を動かされ、憐れみに胸を焼かれる！」

感情的な神です。ここに私たちは「情に絆される神」を見ることができるようになります。情に絆された神は、叫ぶ人びとのために何をするのか。

「神はその独り子を与えられるほどに、世を愛された」

神は自らキリストとして、人となってこの世界にきたのです。それが私たちキリスト者が信じていることです。そして、それが情に絆された神の応答であったと信じるのです。イエス・キリストは、情に絆された神が未来永劫かわることのない「絆」を、ご自分とこの世界との間に繋いだことの宣言であったと私たちは信じています。つまり、神とこの世界の間には切っても切れない絆があるということです。

地上から天を見上げるとき、厚く垂れ込めた雲に覆われていて、天などどこにも見えない。神の思いも憐れみも、熱情も何も見えない。神が見えない。そんなこの世界の現実のまっただなかに、神は鉄のように分厚い雲を打ち破り、数万光年の距離を飛び越えてこの世界にきた。イエス・キリストは、産道から出てくる赤ん坊のように、血だらけになりながら傷を負いながらこの世界にきた。そのことによって神が私たちに示したことは何であったか、それは「そこに確かな絆がある」という事実だったのだと私は思っています。

そして私は、そこに世界のすべての絆を支える絆があると信じています。どんなときも、私たちがどこかへ流されていったり墜ちてしまったりしないように、繋ぎ止める絆があると信じているのです。

さて、今日は「愛のきずな」というベタな題を付けてしまいました。この愛というのは何よりも神が人を愛する愛です。そして、この「愛のきずな」にしっかりと繋がれていることを知るときに、私たちもまたこの世界で「絆」を作り出す勇氣と力を与えられるのではないのでしょうか。「愛」ということは、美しい絵空事でもなければ、理屈や論理でもない。聖書という愛は自己本位な感情でもない。「愛」というのは生き方です。「共に生きる」ということです。傷つき、拘束されながら、しかし互いをしっかりと繋ぎ止め合いながら共に生きる生き方。それが「愛」ということなのだと私は思います。

ここにおられる皆さんにも、ぜひ勇氣をもって、そして信頼をもって、皆さんの身近なところから、絆をしっかりと築いていっていただきたいと思います。きっとそれが皆さんの命をも守るものとなるはずです。

2012年6月26日 今出川火曜チャペル・アワー「奨励」記録